從業員組合、(二)東支從業員組合、(三)領事館と共に組織せる共濟組合が主なるものであつて、その他機械工組合、建築從業員組合があるが、此等は勢力に乏しい。現在同盟加入人員は三十名である。

### 三　東支鐵道職業同盟(ドルコム)

東支鐵道職業同盟は北支在住の露西亞人の職業同盟の主體であつて、鐵道職業同盟を除いて露西亞人の職業同盟の勢力があるとは思はれない。それ程重大なる意義を有するため、勞農幹部の力瘤は專ら鐵道職業同盟に入れられ、勞農幹部は本同盟を以て北滿に於ける勞農露國の勢力の唯一の地盤と心得、その結束と赤化とにあらゆる努力を惜まない。

一九二二年秋日本軍の撤退以來ドルコムの活動は活氣を帶びるに至つたが、更に露奉協定が成立し、その結果露人側東支幹部の赤白更迭となり、イワノフ氏の就任に依つて勞農露國の公然たる活躍期に入るや、イワノフ局長の專斷的行爲(露奉協定に基き東支從業員は中華民國若しくはソウエート聯邦の公民ならざるべからざるを楯にとり、一九二五年四月九日附を以て發したる示達第九四號の如き)等と相俟つて本同盟の勢威は愈々加はり、同盟員にあらずんば從業員にあらずの情況を現出し、同盟員は東支從業員の大多數を網羅するに至つた。

東支鐵道職業同盟の最高機關は、總會であつて總會は之を年に二回召集し、常設機關として幹部會を置き、鐵道運輸從業員職業同盟委員會卽ち原語の Дорожный комитет профессионального союза работников железно-дорожного транспорта を略したるドルコム(Дорком)なる名稱を之に與へてゐる。ドルコムは、法律部、購買組合監督委員會、共濟金庫、文化部、宣傳情報部、生產部、監査委員會、代表者會議の各部に分かれ、各々その事務を分擔してゐる。

鐵道職業同盟にも亦縣職業同盟協議會と同樣區委員會(露名Участковый комитет профессионального союза железно-дорожного транспорта)と地方委員會(露名Местный комитет конторы рабочих и служащих данного предприятия уторжения)がある。メストコムは哈爾濱に於けるものゝみドルコムに直屬して他の沿線のものは最寄りのウチコムに隷屬し、ウチコムは全てドルコムに直屬する。

ウチコムの所在地は、ボグラニーチナヤ、横道河子、昂々溪及び布哈圖である。(滿洲里ウチコムは支那側により最近閉鎖された)

哈爾濱に於けるメストコムは、哈爾濱第八區メストコム、哈爾濱中央停車場メストコム、機關庫メストコム、東支管理局メストコム、中央組立工場メストコムであつて、以上五メストコムは前述せる如くドルコムに直屬する。

沿線に於けるメストコムの所在地は、ボグラニーチナヤ、小綏芬、大平嶺、穆稜、愛河、横道河子、石頭河子、一面坡、阿什河、舊哈爾濱、双城堡、松花江驛、窰門、寧城子、安達、昂々溪、富拉爾基、札蘭屯、布哈圖、海拉爾、札賚諾爾及び滿洲里である。

## 第三節　國家保安部(ゲ・ペ・ウ)

勞農露國公民が多數居住せるのみならず夫れが討赤を標榜せる白系殘黨と雜居せる北滿に於て、その監視と赤化とを目的として勞農露西亞がゲ・ペ・ウの一大網を設置してゐる事は敢へて怪しむに足らない。

北滿のゲ・ペ・ウの組織人員等は素より極祕に屬し、正確に之を知るを得ざるも、種々情報を綜合するに、哈爾濱に於ける其の組織及活動は大體左の如きものと考へられる。

哈爾濱にはゲ・ペ・ウ支部があり、莫斯科より任命せられたるアレキサンドロフと稱する者が滿洲總括ゲ・ペ・ウ員として副領事某の指導の下に號令しつゝあると謂ふ。哈爾濱支部主任はワシリイ・イワノヴイチ・シーロフと稱し、グランドホテルに住し、表面上の職名はソウエート總領事館の旅券係兼會計係なれども實際はソウエート總領事館の二階にその事務室を有し、ゲ・ペ・ウの業務に從事してゐる。尙其の部下にはペトロフ及びフエドロフなる二名の辣腕家がある。

哈爾濱のゲ・ペ・ウは全市を六區乃至八區に區劃し、毎區に密偵三名乃至五名位を配し、各自擔任區域に關する報告をシーロフに提出する。シーロフは毎週二回全般の報告を滿洲總括ゲ・ペ・ウ員及副領事に提出し、毎月一回乃至二回諸種の報告及事務の打合せのため會合するものゝ如くである。而して此等探偵費及び支那側買收費は相當の巨額に達し何等かの名義にて東支鐵道から支出せらるゝといふが眞僞は確かでない。

密偵は相互に知らしめざる如く組織せられ、一部の密偵長と雖も概括せる問題を知悉することが出來ない。總てシーロフ一人の手にて纏められ、他の者は其の一部分の外何等知る由がない。斯くて其の祕密を保ち且つ密偵の腐敗を防ぎつゝある。ゲ・ペ・ウ員及密偵は多く僞名したる旅券或は身上に關する文書を作製し之を所持してゐると云ふ。尙哈爾濱支部に屬する者にしてドルコムを通じて沿線に配置せられてゐる者があり、其の中には莫斯科から直接の任命を受けてゐるものも少くない。

ゲ・ペ・ウ員の行動に關しては後節に於て述べることゝする。

## 第四節　所謂赤化運動に對する考察

先づ世に赤化宣傳機關と稱せらるゝものを擧ぐれば、總領事館、ゲ・ペ・ウ、勞農系新聞、露國共產黨、哈爾濱縣職業同盟協議會、東支鐵道職業同盟、東支鐵道商業部が卽ち夫れであつて、その最高指揮者は奉天總領事クズネツオフ氏であると云ふ。此の外或る意味に於てグリゴストルグ支部、極東銀行及其他露國々營機關の代理部出張所も亦赤化宣傳の補助機關と見られてゐる。又一九二五年七月に發會せる奉天の猶太人居留民會は政治的意義を有せざるものゝ如くであるが、會員の大部分がソウエート露西亞の公民であれば、勞農系諸機關と密接なる關係を有する事は想像するに難くない。

勞農機關の赤化宣傳の眞相を捉へる事は、事が徹底的に祕密裡に行はれ又革命後の露西亞の祕密運動が著しく洗練せられ頗る巧妙に行はるゝ爲に殆ど至難の事に屬するが、然し密偵の報告及其の他の情報に依ると從來前記諸機關が所謂赤化運動に關係してゐる事だけは確實である。

所謂赤化運動なるものが積極的に露骨に行はれたのは一九二六年迄であつて、今日は一九二四年又は一九二五年頃の時局とは異り露國の內治外交の振はざるに對し東三省支那官憲の威力は頗る昂り、赤化運動たらずとも少くも赤系露人の會合といへば忽ち之を白眼視し之の閉鎖を企て又は兵力を以て强制的に解散せしむる等の擧に出づる爲め、勞農露國系に屬する前記赤化宣傳機關は實際に戰々兢々たる狀態にある。海拉爾の東支商業部出張所、滿洲里のロチコムの閉鎖も亦其の一端の現はれである。過般奉晉戰の際奉天軍が破れて張家口を拋棄したる旨海拉爾の支那守備隊參

謀長の下に入電あるや、此の時早くも驛構內鐵道倶樂部に於ては鐵道從業員の集會が行はれ、中に一名演壇に立ちて張家口陷落の電報を朗讀し、反張演說に花を咲かせ居る始末に躍起となりし支那官憲は直に聽衆を解散せしむると共に同倶樂部を閉鎖し門扉を釘つけとし向後一切其の使用を嚴禁してしまつた。此の事實は職業同盟の牒報機關が如何に良く整備せられ如何に各員間の連絡が立派に保たれてゐるかを物語るものであると共に、支那官憲の取締が如何に峻嚴であるかを示すものである。言ふ迄もなく鐵道倶樂部は露支人の公共機關であるのみならず、沿線の鐵道倶樂部は土地唯一の娛樂機關であり、あらゆる性質の集會興行は此所で行はれるのである。

要するに近來支那官憲の赤化運動取締は頗る嚴重を極め、容易に乘ずる機會を與へず、赤露も昔日の如き大膽なる運動は不可能となつてゐる。從て近來の赤化運動なるものは以前に比して極めて潛行的にして消極的のものである。而して赤化宣傳の系統は左の三つに分たれる。

第一は露國共產黨員である。共產黨員は職業同盟に籍を置いてゐるが、その宣傳上の任務はソウエート國籍に在る露西亞人を左傾的に指導し、職業同盟の結束を固むるにある。

第二は國家保安部(ゲ・ペ・ウ)員である。ゲ・ペ・ウ員は白系露人に對する積極的赤化運動に從事する。即ち白系露人を勸誘して勞農露國の國籍を取得せしめ、職業同盟への加入を慫慂する事を以て其の目的としてゐる。職業同盟への加入勸誘を同盟內の共產黨員をして行はしめずゲ・ペ・ウ員をして行はしむるのは、同盟員の斯る行動により職業同盟に對する支那官憲の壓迫を誘發するを恐るゝがためである。

第三は支那人及朝鮮人に對する宣傳である。露國共產黨員は他國人に對しては直接宣傳を行はず、支那人に對しては支那共產黨員、朝鮮人に對しては朝鮮共產黨員をして當らしめてゐる。

支鮮人に對する露國共產黨員直接の宣傳は一面に於て不便を免れず少くとも第三インターナショナル又は自國人に依る宣傳に比して其の效果は少いと見ねばならぬ。

最近スターリン氏一派の現勞農政府幹部は東鐵職業同盟に對して極東政策の更新と展開策の立て直しに黨の結束をより鞏固にするため左の意味の內訓を發して來たと傳へられるが、之は右の觀察を裏書するものと云ふべきである。

即ち左の如くである。

一、東三省內に於ける共產主義運動は全然南支に於けると分離して指導方法を採り日本との衝突を意味する誘發交涉はなるべく回避すること。

一、東鐵職業同盟は常に支那下級勞働者に對し反軍閥的意識を與へる敎養に努め反軍閥運動の機を造る樣指導すること、但し直接行動は現在にては避くること。

一、白系露人の歸國勸誘及懷柔策に努力し、現在八分迄は既にソウエート制に歸依せるを以て其の運動には成るべく白派中堅人物を當らしむること。

一、對日鮮及上海方面には共產派藝術の紹介に依つて絕えず宣傳を行ひ不斷の努力を拂ふこと。

滿蒙に於ける東洋人種の勞働者に對して露國共產黨員が直接宣傳を試みたる如き報道は過般の本溪湖の炭坑爭議の際にも屢々新聞記事を賑はせたものであるが、之等は露國共產黨に取つては痛からぬ肚を探られたる類であつて、斯る觀察は少しく神經過敏なるの譏を免れない。何故なれば彼等の間に宣傳ビラ二千枚を撒布する事の效果よりも斯る

行爲が暴露したる場合に於ける東支鐵道露西亞側幹部の不信用と日本側の露國に對する警戒によつて受くる打擊の方が如何ばかり高價であるかは、宣傳の巧者である彼等に取り餘りに明瞭な道理であるからである。此の點より見て滿蒙の赤化運動は北にある露國共產黨よりも南にある支那共產黨の手によつて行はるべきものと見るべきである。

之を要するに滿蒙の赤化運動に於ける露國共產黨員の役割は消極的であつて少くとも現在に於ては世に喧傳せらるる如き活躍はしてゐない。然し乎は一面の觀察であつて、自ら他の半面のある事を忘れてはならない。卽ち露國共產黨の內面的援助である。

この內面的援助とは、第一に運動資金の供給、第二に政策上の指導、第三に情報の蒐集及文書の傳達である。

運動資金の供給が從來東支鐵道によつて行はれて居ると云ふ事は恐らく事實であらう。つまり東支鐵道に依つて上る利益金を商業部又は極東銀行を通じて赤化宣傳費卽ち運動員の買收費、ソウエート系新聞社への補助費、反張軍隊への軍資金に當てる譯である。

次に赤化政策の指導の任に當るものは各地勞農領事館であつて、領事館內には赤化宣傳事務を扱ふ特殊の一係が秘密に設置せられてゐる。領事館には館員以外に所謂秘密館員なる者があるが、此等は當然秘密運動に從事するものであつて、其の人員は增減極めて甚だしく正確なる數を突き止める事は不可能である。

文書の傳達、情報の蒐集は領事館はじめソウエート系のあらゆる機關が行ふ所であつて、各國營商事機關及東支鐵道商業部は素より哈爾濱及奉天の如き都會に於ては個人商店の看板に隱れて堂々情報を蒐集し、又は會合を催してゐるものが少くないといふ。東支鐵道商業部は由來赤化運動の伏魔殿と稱され、世の視聽を集めてゐるが、同部の赤化宣傳上の任務も前述せる運動資金の傳達供給及び情報の蒐集の範圍を出でざるものと考へられ、特產物を擔保とする金融業務竝に買付のための部員の出張に依りて此の目的を達してゐるものゝ如くである。因に同部の金融業務は支那官憲の嚴禁する所であるが、今尙ほ秘密裡に行はれつゝあると云ふ。

支那勞働者に對する勞働組合組織の宣傳は可なりの偉效を奏し、從來各地の工場に所謂細胞（ヤチエイカ）が組織せられ、一九二五年三月のプロフインテル（赤色國際職業同盟）の報告には、南北滿洲を通じ七十二のヤチエイカが存在する事を明記し、この中幾何が南滿諸工場に存在するかは特殊の調査を俟たずば判明しないが、少くとも斯るヤチエイカの存在する事だけは事實である。尙ヤチエイカは常に他の勞働者を指導する核心となつて同僚を階級鬪爭に誘ふを以て任とするが故に、現狀に於ては如何なる場合にも滿洲に於ける勞働爭議に際してこのヤチエイカの活動せざる例は無しと附記してゐる。該報告の內容が事實と符合するや否やは別問題として少くともこの運動を度外視して滿洲の勞働爭議を見る事は出來ない。カルペンコの政策は「支那人の待遇均等運動」を誘導し、あるものゝ如く、先づ哈爾濱に於ける東支鐵道中央機械工場に於ける露支職工の待遇を均等にし、住宅の如きも從來支那從業員の居住を許さざりし洋風社宅を彼等に開放し、此の實例によりて南滿各地の風潮を煽りつゝある。この意味において南滿洲に於ける赤色國際職業同盟運動は極めて重大性を有するものである。

# 第十三章　在滿白系露人の勢力

歐洲戰爭と露國革命との結果多數の露國避難民は滿洲里驛を初め後貝加爾、黑龍、沿海の各州より滿洲に侵入し、一方一九二二年日本軍の撤退により最後の戰線を放棄したる白軍は浦潮より海路朝鮮元山に逃れ、陸路吉林長春に出た。斯る白系露人は最初こそ莫大なる數に達したが、最近では全滿を通じて約五萬と稱されてゐる。

滿洲に於ける白系露人中の主なる人物を擧ぐれば、哈爾濱に於けるメフオヂイ大主教（滿洲正教徒監督）、リユーボフ陸軍中將（元露國極東軍幹部）、コスミン陸軍少將（元軍司令部員）、ゴロワチヨフ博士（西比利派代表）、シリニコフ陸軍少將（山東軍特派武官）、ボクロフスキイ博士（ブシキン中學校々長）、ノヴイコフ（露國學生協會々長）、ギンス博士、辯護士イワノフ（メルクロフ政府首相）、ゴンダツチ（元沿黑龍地方總督）、シチエルコフ（元ヂテリクス政府閣員）奉天に於けるブロンスキイ陸軍大佐、大連に於けるヴオストロチン（前國會議員）及ハンジン（前オムスク政府軍司令官）等である。

白系露人は反ソウエート主義者である點に於て同一の色彩を有するものであるが、更に強いて之を區分するならば左の四派に區分する事が出來る。曰く（一）ニコライ派、（二）キリール派、（三）セメヨノフ派、（四）西比利派である。

ニコライ派と稱するのは前ニコライ・ニコラエヴイチ太公を首班とするモナルヒストの一派であつて、舊コルチヤク軍の殘黨が之に屬してゐる。ニコライ太公は巴里にあつて、その側近者としてはデニキン、ウランゲリ等の反革命の士を算へ、支那にては北京に於ける前東鐵長官ホルワツトがニコライ派の代表となり、大連―ヴオストロチン（前國會議員）、奉天―ブロンスキイ（前陸軍大佐）、哈爾濱―ゴンダツチ（前沿黑龍地方總督）、上海―グロツセ（前上海露國總領事）各々當該地方代表である。この中ゴンダツチはニコライ派とは別個に彼自身を目標とせる同志を有し、目下の處その去就は確定的でない。ニコライ派は純帝政派であつて、舊帝政露西亞の復活を目的とし、ニコライ太公の命令一下直にその麾下に參じて國難に赴くものであると稱してゐる。

キリール派とは前露帝の從弟キリール・ウラヂミロヴイチ太公を擁する一勢力であつて、民本主義の共和制を露國に布くを以て目的とすると謂ふ。太公は目下獨逸コンブルグに居住し、滿洲に於ては奉天在住ジヤドヴオインが主要人物である。同人の妻は滿鐵に奉職してゐる。

セメヨノフ派と稱するのは反革命の猛將セメノフを首班として內外蒙古の諸侯と結び、西比利統一を畫し、その獨裁政治を實現せんとするものである。滿洲に於ける中心は奉天にあるものゝ如く、滿洲里方面に於ては海拉爾（當方面に於ける中心人物は前後貝加爾州政務部長にして目下海拉爾に居住せるタスキンである）を中心として同地より西方は避難ブリヤト人を通じて蒙古人と連絡し、滿洲里に於て連絡する。セメヨノフは一九二〇年コルチヤツク提督の最後の宣言に從ひ同提督の後を襲ふて白系露將卒の統領となるを承認されたしと主張し、目下在支白軍殘黨大同團結を講ずべく哈爾濱の白系將卒の機關たる避難民救濟會會長シリニコフ少將と交渉してゐるが、未だ解決しない。

西比利派は一名綠派とも稱し、もとは黑龍州に散在せる舊將校及哥薩克と呼應して同州を根據として赤軍を掃蕩し西比利に共和制の白系獨立國の建設を企畫したものであるが、現在では單に農民の擁護を標榜して反ソウエート運動

を爲してゐる。中心人物は大學教授ゴロワチョフであつて哈爾濱に居住してゐる。海拉爾より北方根河地方、ネルチンスキイ・ザヴオードを經てスレーテンスクと連絡し、他派に比し最も遲くまで（一九二四年）ソウエート官憲に對して爭鬪を試みた一派である。

尙目下天津のナシプーチ紙主筆ラズウモフが中心となり（背後に張宗昌の幕僚メルクーロフの支援があると謂はれてゐる）大連の一部の白系露人が之に參集してフアシスト團の組織を計畫してゐるが、白系露人中に反對者があり、未だ實現せらるゝに至らない。

白系露人の團體なるものは過去及現在に於て頗る多數に上り枚擧に遑ない程であるが、最近知られたるものは、哈爾濱に於ける軍事協同團、學生協會、避難民救濟會、運輸業者シンヂケート、奉天に於ける軍人會、砲兵軍人會、ボイスカウト、聯合青年團、大連に於ける露國避難民團及軍人會、長春に於ける露國避難民救濟委員會（委員長マルコフ）、滿洲里に於ける避難民救濟委員會等である。此等の機關は先に陳べたる政治的に見たる四派の何れかに屬する譯であるが、然し元來此等團體の目的とする所は實は相互扶助にあるのであつて、政治的軍事的色彩は寧ろ乏しい。

由來支那官憲の在滿露人に對する取締は赤系に對して嚴にして白系に對して寛なるを常とし、露國革命十周年記念日に赤系露人の行動に對し徹底的の束縛を加へ警戒を嚴にしたるに引換へ、白系露人に對して大示威運動を許可し各地に於て反ソウエート運動の行はれたるを默過したるが如きは、支那側の取締方針を如實に物語るものである。これに關し一九二七年十一月八日在哈勞農露國總領事が蔡交涉員に提出したる抗議書は一面に於て白系露人の暗中飛躍に觸れ居り興味あるが故に、特に左に掲ぐる事とする。

抗議書內容

本夏初頭より當地白系露人機關は數次會合を催し白系諸團體の戰時教育に腐心しつゝあつた。その結果祕密軍事機關の編成を見るに至り、その最高機關は卽ち軍事協同團である。これが首腦部は

一、團長リユーボフ將軍　二、副團長ルイチコフ將軍　三、幹部ウオロドウチエンコ將軍　四、白系パルチザン運動指揮者サハロフ將軍

にして、右首腦部は哈爾濱大道街なるリユーボフ將軍邸に於て數回に亘り密議を凝らした。彼等はその會場を祕するためゴルランなる者の名を以て速記教習所の看板を揭げ、會合者に對しては速記術講習生の僞證明書を交付してゐる。右幹部等の計畫しつゝある謀策は、次の諸地方に於けるソウエート機關の覆滅運動である。

後貝加爾地方—シリニコフ將軍、黑龍州—スイチョフ將軍、沿海州—コシミン將軍がその任に當ることとなつてゐる。

また右首腦部は白軍士官の參加を求め、加盟者は軍事的統制を保つてゐる。軍事協同團は自己の周圍に二重の團體を持つてゐるが、その一つはロシヤ學生協會にして、彼等の行動は官憲許可の範圍を超えてゐる。この外(一)ロシヤ・フアシスト團、(二)キリスト教信徒協會、(三)極東軍事教育普及會等があり、之等の諸團體は一九二七年十一月七日廢帝ニコライ追悼會及其後の行動の中心勢力となつたものである。彼等は尙ソウエート代表者の暗殺を煽動するが如き宣傳文を配布した。調査せる處に依れば此等書類は埠頭區ソフイスカヤ寺院の印刷所にて印刷せるものである。

所謂極東軍事教育普及會の行動に對しては特に注目されたい。同會の會合は最初露國學生協會の建物内にて行はれ、最近は第一實業學校(タモジナヤ街十五番地)に於て行はれてゐる。同會會長は元少將アンドグスキイである。

此等團體の行動は露奉協定に違反し、ソウエート聯邦と支那との間に誤解を生ずるものである。依つて此等團體の總ての行動を直に根絶すべき手段を取り、此等犯罪的行動を採り且つ反ソウエート祕密運動を行ふ者を處罰し不法なる文書を印刷せる印刷所を閉鎖せんことを要求するものである。

最近多少稚愚的ではあるが、ソウエート聯邦旗の凌辱、赤系露人の双傷等積極行動に出づる白系露人が現はれ、赤系露人に恐怖の念を懐かせてゐる。ソウエート當局は彼等に對抗するがために最近赤系暗殺團を滿洲へ入り込ませたといふ報があるが、之は最近赤白露人の關係が多少緊張せる關係上ソウエート系露人が自衛手段を講ずる事は有り得る事と思はれる。ゲペウ員は白系露人の最も怖るゝところであつて、滿洲里にては國境驛なる關係上勞農の魔手も比較的露骨であつて、往々白系有力者の行衛不明となる事がある。

ゲペウ員は斯る恐怖手段を白系露人に加ふる一方に於て、白系露人の勞農國籍の取得を旺に勸誘して白系勢力の切崩しを策してゐる。

露國避難民の救濟事業は革命後暫時は相當世の視聽を集め實際に於て可なりの成績を收めたのであつたが、今では他よりの救濟は全く打切りの有樣となり、僅に漢口に居住せるリトヴイナなる富豪の補助があるのみである。リトヴイナ女史の避難民救濟は頗る大規模であつて、一時的の補助にあらず定期的に行はれてゐる。哈爾濱に於てはネストル大主教、看護婦保護會其他無料宿泊所が同女の義捐を受け、滿洲里に於ては避難民救助委員會が同女から年額八、〇〇〇圓の補助を得て小學校、圖書館、無料診療所、孤兒院等を經營し、同小學校には後貝加爾地方から入學せる生徒もある。長春では同女の義捐金により避難民救濟委員會が病院と小學校とを經營してゐたが、義捐金運用の當を缺きたるため目下送金が杜絶し病院も小學校も經營困難に陷つてゐる。

外部よりの義捐者はリトヴイナのみであつて、各地の救助委員會は演劇又は音樂會を開催し、その入場料を經費に當て又は單に寄附金を募集する形式をとつてゐる。

白系露人中には支那國籍を取得したる者が少くない。

職業同盟に關する多數の文獻の著者である前支那職業同盟書記ア・ヴエ・トロツキイ氏の算定によると、露人の支那國籍取得者は、ニエチヤエフ軍隊を除き、全支那共和國を通じて一〇、〇〇〇人を算し、この中約六、〇〇〇人は東支鐵道沿線に居住してゐる。

滿洲に於ける支那籍露人の職業は三大別される。即ち第一は支那官憲又は民間企業の勤務員及勞働者、第二は主として三河地方(海拉爾の北方)に定住したる沿黑龍地方の哥薩克及農民(この中には支那國籍を未だ取得せざる者も多數ある見込)、第三は東支鐵道從業員である。

東支鐵道に於ける白系露西亞人の勢力に就ては附言する必要がある。

露奉協定の成立により白系に替つて赤系露西亞人が東支鐵道の幹部に加はるに及んで前管理局長オストロウモフ時代の所謂白系從業員に對しては高級たると下級たるとを問はず旺にその罷免が行はれた。而して一方に於てソウエート露西亞の國籍取得を白系露西亞人間に勸誘奬勵し、他面東鐵管理局長は支那人側理事の承認を經ず無斷にて所謂九

四號示達を發し、それを以て管理局長は露奉協定に基きソウエート露西亞若しくは支那の國籍を有せざる從業員は總て罷免すべきを公布した。この所謂九四號示達は其の後支那側幹部の抗議により取消となつたが、本示達に依らず、幹部の赤白更迭の直後の大移動により罷免せられ又その後漸次に淘汰せられたる白系從業員の數は頗る多數に上り、該示達に脅されてソウエート國籍取得の手續を爲せる者も少い數ではない。

東支鐵道露人從業員は、勞農國籍、支那國籍及無國籍の三種に分かれ、その各種の人員は一九二七年の調査によると左の如くである。（昭和二年八月二十八日哈爾賓日日新聞所載）

| | 勞農國籍 | 支那國籍 | 無國籍 |
|---|---|---|---|
| 哈爾濱管內 | 一、四八〇 | 二九一 | 八 |
| 滿洲線 | 八、九四五 | 九八五 | 一、四一二 |
| 計 | 一〇、四二五 | 一、二七六 | 一、四二〇 |

白系露西亞人たるを明瞭に標榜せるものは支那國籍露人一、二七六人と無國籍露人一、四二〇人との合計二、六九六人であつて、これを勞農國籍露人の一〇、四二五人に比較すると其の差は頗る著しいのであるが、勞農國籍露人の全體を以て直に赤系と見做す事は誤りであつて、その中には生活の保障を得るがために便宜上ソウエート國籍を取得した所謂御都合主義者が多數を占め、その大半は既にソウエート公民たるべく各地勞農領事館に手續き中であるが、單に駐在領事より手續書受領の證明書を受け居るのみであつて、莫斯科政府の正式許可を受けてゐない。

東鐵勞農幹部の意嚮としては白系露人は速かに罷免して、その後任に本國から眞の共產黨員を塡補したい肚であるが、支那側の牽制によりその實行を阻まれてゐる。現副理事長ラシエヴイチ氏は其の就任するや、現在の勞農國籍從業員を目して赤大根なりと喝破し「二萬社員中一朝有事の際に信頼するに足る者果して幾何ありや」と嘆したと謂はれるが、蓋し無理からぬ述懷と謂ふべきである。過般東鐵商業部に大移動が行はれたが、これはラシエヴイチ氏の抱懷せる政策の片鱗と見るべきである。

商業部內の大移動と稱するのは一九二七年十月同部長代理フエドセエフ、同附帶事業課長ブートフ、同庶務係長ブルロヴイチ、同金融及倉庫係長サハロフ、同運賃係長代理カサトキン外七名計十二名の淘汰である。此等の人物は元オムスク政府に屬した官吏であつて、オムスク系と稱せらるゝ者であるが、その手腕の大いに信頼するに足るものがあり且つ其の人物によつて受ける對外的信用と白系露人の懷柔の便とを目論見、前管理局長イワノフ氏が此等を重用し次いで現局長エムシヤノフ氏もイワノフ氏の方針を踏襲した。然るにラシエヴイチ氏は從來此れに對し反對の意見を有し、彼等に慊らず、秘かにこれを淘汰する機會を窺つてゐたが、彼等のソウエート露西亞入籍願の拒絕及東支鐵道從業員を露西亞及支那の國民に規定し居る露奉協定を楯に取り、暗々に反對せるエムシヤノフ氏に對し高壓的態度に出で遂に彼等を馘首せしめたのである。

本事件は純白系露西亞人間には勿論、入籍手續中の勞農側從業員間にも異常のセンセーションを捲き起しつゝある。その後彼等の復職運動が效を奏し原職に復したとの報があつたが未だ眞相を審かにしない。

東支鐵道の實行機關たる管理局が勞農側の手中に有る關係上白系露人が任用、給與等總てに於て不利なる立場にあ

るは免れないが、然し支那側が勞農側に對する政策上彼等を利用する立場にあるために、彼等も亦東支鐵道に於ける一個の勢力たるを失はない。

これを要するに在滿白系露人は各地に於て各樣の團體を形成して赤系露人乃至はソウエート露西亞に對して堂々陣を張つてゐる如く見えるのであるが、翻つて考ふるに張作霖が白系露人を糾合し討赤の援助を與ふる如きも一場の夢であり白系露人は單に彼の藥籠中のものとなりたるに過ぎず又哈爾濱を始め奉天、大連、北京、天津、上海の各地には白系諸團體があり、此等各團體の間には多少の聯絡がある如くであるが、遺憾ながらそれに實力が伴はない。また之を精神的に見ても、一般白系露人はその亡命の當初こそは帝政復興に唯一の希望を繫ぎ有らゆる生活苦に忍從して來たが、その多くは革命後既に十年、長年酬ひられざる努力に漸やく倦み、總てが打算に走り、只管一身一族の安泰を圖るに餘念なく、眞に帝政露西亞の復興に盡さんとする熱血に燃ゆる者は少い。從つて果して彼等の有力者が彼等の露西亞を實現するがために此の困憊せる一般白系露人を引締め又は粒々苦心の結果漸く當地に安住の地を見出して今では全く政治問題に無關心となれる一部の白系露人を誘引して、これを政治的軍事的に組織化し得るや否や大いに疑問とせねばならぬ。若し在滿白系露人の有力者等が眞に在滿の同志を動かし得て積極的行動に出づる期ありとせば、开は恐らくソウエート國家が內部より崩壞し初めたる場合の外には無いであらうといふのが一般の觀察である。

## 參考資料


一、淺野虎次郎氏著「滿洲二十年史」
一、久間猛氏著「北滿洲の政治經濟的價値」
一、大正十四年三月參謀本部調製「經濟上より見たる哈爾濱」
一、哈爾濱日本商業會議所一九二七年編纂「哈爾濱の概念」
一、哈爾濱商品陳列館パンフレット「哈爾濱に於ける列國の經濟勢力」
一、哈調資料「北滿主要都市商工概覽」
一、哈調資料「政治的方面より見たる呼倫貝爾事情」
一、哈調資料「北滿に於ける漁業」
一、哈調時報特3「穆稜炭坑」
一、哈情第二號「在哈蘇聯商業機關の現狀」
一、滿鐵地質調査所編「滿蒙及北支那の炭田」
一、滿鐵本社調査課譯ヴェ・ア・ワシケーヴイチ氏著「滿洲の森林」
一、同　調査課編「北支那貿易年報」（各年）
一、同　調査課發行「調査時報」第五卷第十號「呼倫貝爾に於ける露國のコンセッションの權利に就て」

## 參考資料

一、調査課小冊子「露亞銀行と東支鐵道との關係に就て」
一、東支鐵道經濟局發行東省雜誌一九二七年第八號「東支鐵道札賚諾爾炭坑」（露文）
一、同上一九二六年第七號「札賚諾爾炭坑の經濟的意義」（露文）
一、同上同號「興安嶺東部斜面に於ける林業」（露文）
一、同上一九二七年第五號「一九二三—二六年に於ける極東銀行の業績」（露文）
一、東支鐵道經濟局編「北滿洲及東支鐵道」（露文）
一、東支鐵道一九二六年度年報（露文）
一、東支鐵道管理局長一九二七年度報告（露文）
一、エム・カ・ゴルデエフ氏著「北滿洲の森林及林業」（露文）
一、哈爾濱取引所發行「一九二七年度實業家案內」（露文）
一、ノーヴオスチ・ジズニ紙創刊二十周年記念パンフレット（一九二七年發行、露文）
一、露亞時報（引用せる卷號數は本文中にあり）
一、東　洋（同　上）
一、哈爾濱日日新聞（引用せる號數は本文中にあり）
一、滿洲日報（同　上）
一、モルワ紙一九二七年十月二日東支鐵道合辦三周年記念號

昭和三年五月七日印刷
昭和三年五月九日發行

編輯人　南滿洲鐵道株式會社庶務部調査課　佐田弘治郎
發行人　大連市桂町一四ノ二　磯部信一
印刷人　大連市東公園町二十一番地　吾妻力松
印刷所　大連市東公園町二十一番地　株式會社滿洲日報社印刷所
發行所　南滿洲鐵道株式會社

14.5
171

終